〔嬉遊笑覽二中器用〕玉緣の一文字といへるは、丸き紙を中より二ツに折たるやうに、頂の一文字になりたるなり、

〔柳亭筆記四〕玉緣

玉緣といふは、さまで深からぬ編笠なり、笠の緣を見事に組たるよりの名なりとも、又革にて玉ぶちをとりたるよりの名なりとも聞り、いづれが是か、吉原つれ〳〵草矢壓、延寶二年印本三谷通する者の事をいへる條に、くらゐ高くやんごとなき人、みづからいやしきふりに玄なして、人にあはじとこも笠に玄のばるゝこそおもしろからめ云々、同書注こも笠こもそうの笠なり、昔はかやうのものまで、今とはかはり、玉ぶち一もんじとて、すぐなるをかぶり、たゝみたるはこもそう笠とてきらへるが、此ごろはこれをもつはらにするなりとあり、○略中俳諧桃の實元祿六年印本撰者冗峯が詞に、玉ぶちの笠きたるは、今の世に乞食女ならではなし、元祿に廢れし證、○略中洞房語園に、玉緣一文字今はまれなりとあれば、此笠は熊谷笠よりは前に廢りしなるべし、

〔昔昔物語〕萬治の比、江戸中かつぎやむ、酉年○明暦三年大火事以後、女歩行してありく時、ふくめんの上に、玉ぶちと云編笠をかぶりし、御旗本中何もかぶる、

〔異本洞房語園上〕勝山、丹後殿前風呂屋に居しときもすぐれてはやりたる女なり、寛永の頃はやりし女、かぶきの眞似などして、玉ぶちの編笠に、裏付のはかま、木太刀の大小をさし、小唄うたひ、せりふなどいふ、其立振舞見事にて、風體至てゆゝ敷見へしと也、

〔談林十百韻〕

小部屋の別れおしむ妻藏　雪柴

玉緣の笠につらぬく泪玄れ　卜尺

〔和漢三才圖會二十六服玩具〕臺笠○略中